(133) 栃木県日光市川治温泉の仮称「川治鉱山」

男鹿川沿いの旧鉱山探査（例えば、既報の芹沢鉱山等）のため、国土地理院発行の古い地形図を入手していた。その地図を眺めていたとき、川治温泉付近に鉱山記号があるのを見つけてた。が、鉱山名の文字は記されていなかった。手元の資料類を調べたが、川治温泉近傍にある鉱山名を探し出すことはできなかった。しかし、地形図に記されているからには、小さくはなく、名のある鉱山に違いないと考え、旧地形図と最新地形図を手引きに探査を行った。最初の探査行は２０１０年のことである。容易に立派な坑口跡を見つけることはできた。坑口から少し中に入った所の坑壁に、成長中の僅かな孔雀石が確認できた。が、全くズリらしいものはなく、鉱山施設跡も確認できなかった。その後、この鉱山跡については、記事を纏めることも無く、そのままとなっていた。

数年経た２０１４年になって、この無名鉱山を思い出した。やはり纏めておこうと思い立ち、２回目の探査行を行った。初回に見つけた坑口跡以外に，上流に幾つかの坑口跡を見つけた。また、沢（大下沢）の左岸少し上部には、放棄されてから久しい、長い距離に渡って開削された旧用水路が延びているのを見つけた。上流部にある取水堰から、下流にある住宅地までの、この用水路には管理・維持用のためであろう側道がもうけられており、現在でも、それほどの危険も無く歩くことができる。トレッキング向きかもしれない。が、当然、「事故は自己持ち。」

現地までの経路は次の通りである。今市地区から１２１号線を北上していく。川治温泉内を進んでいくと、道路は急左折し，川治橋を渡っている。が、現地へは、橋を渡らず、左折しない。その手前で、徐行し、目先にある消防署の方へ直進していく。消防署の脇を通過し、あとは、道に沿って上へ上へと進んでいく。舗装されている林道は、稜線の所で終点となっている。駐車領域があり、車を置ける。

稜線から大下沢が下に望める。多分、堰も見えよう。この堰の少し上、沢の絶壁状の右岸の沢水準に、立派な入口形状をした坑口の一つがある。ここへは、駐車場所から、堰を目指して、斜面をそのまま下るのもよい。或いは、駐車場のある稜線は遊歩道となっているので、この遊歩道を少し下ってから、堰を目指していくのもよい。

現地は２回の探査しか行っていない。鉱山施設跡、ズリ跡は確認できていない。堰の設置に伴い、沢床が上昇し、埋もれてしまったとも思われる。付近を良く探査をすれば、露頭鉱脈、その他鉱山跡の痕跡などが見つけられるかもしれない。訪問時期は渇水期が良いであろう。

探査日　　２０１０年、２０１４年４月

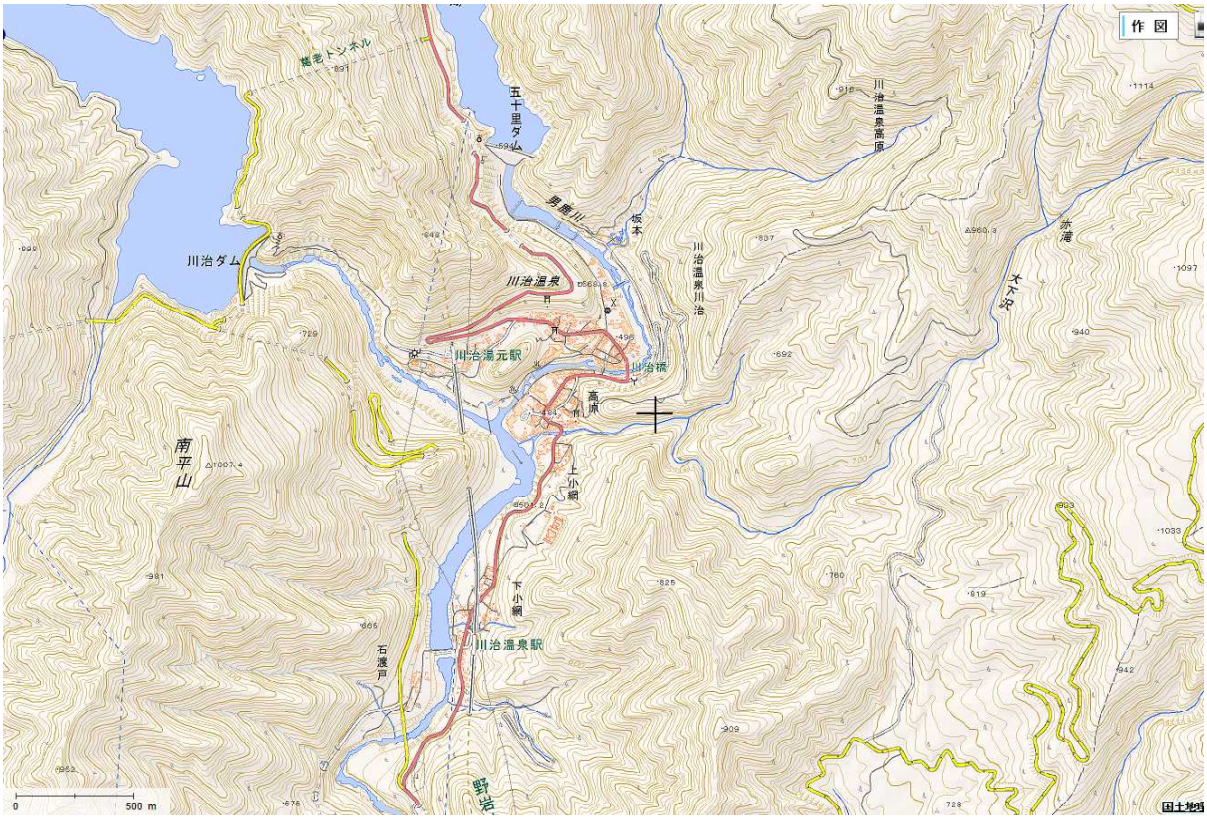

図１　Ｙａｈｏｏの地図サービスより複写掲載。中央付近の赤丸が鉱山跡。上小網地区から山道を登り上がると、４０分ほどで、五十里ダムと川治ダムを同時に一望できる展望台に達する。地図からもそれが見て取れる。

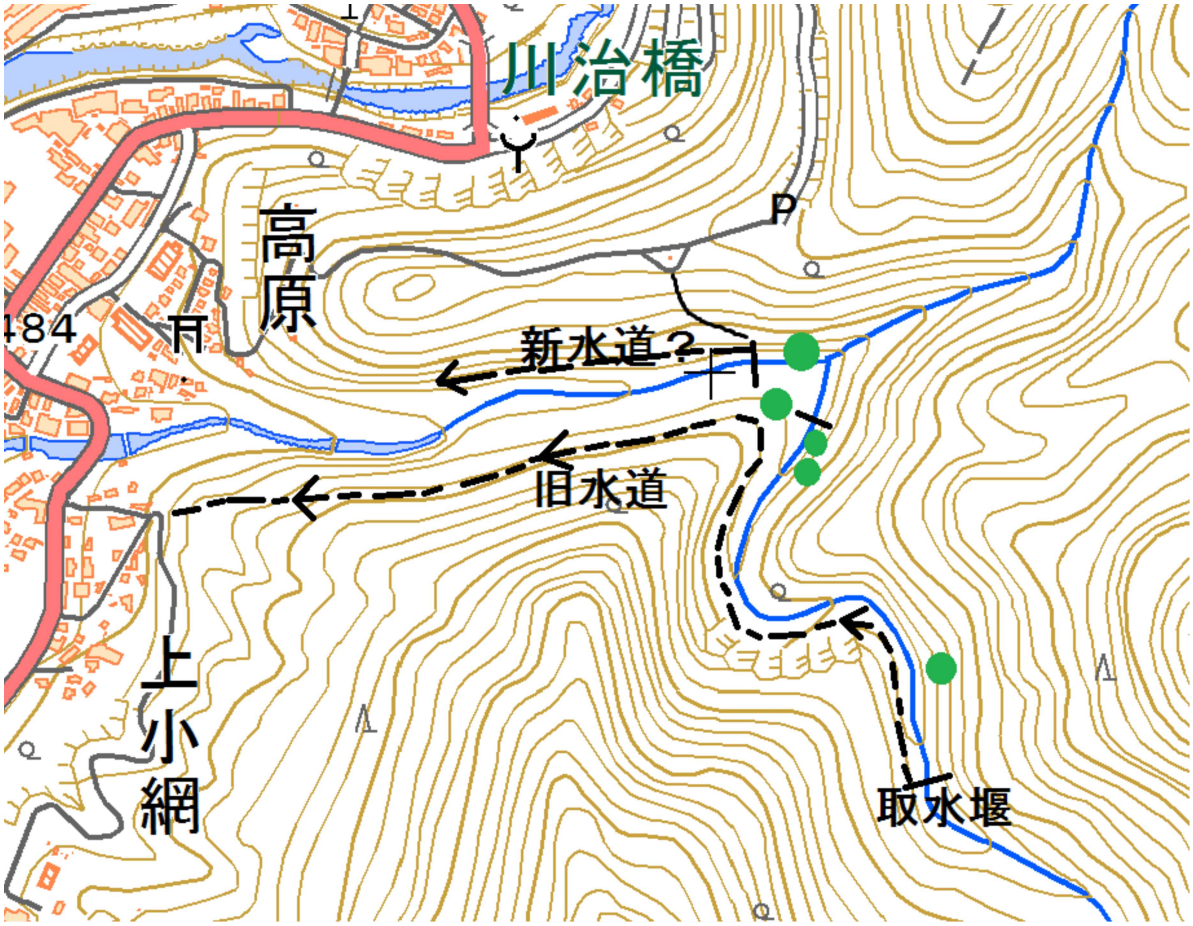

図２　図１の部分の拡大図に相当。Ｐは駐車場。黄緑丸が坑口跡。黒線分が堰・砂防ダムなど。Ｐから尾根上の遊歩道を少し下り、堰に繋がっている黒曲線が、消えかかっている山道。この沢の名称は「大下沢」。沢の左岸上部には、黒破線で書き込んだ旧水道が残っている。歩道も併設されており、現在でも危険無く歩行できる。下っていくと、住宅地に行き着く。沢の右岸にも用水道が堰の所から下っている。新水道か？

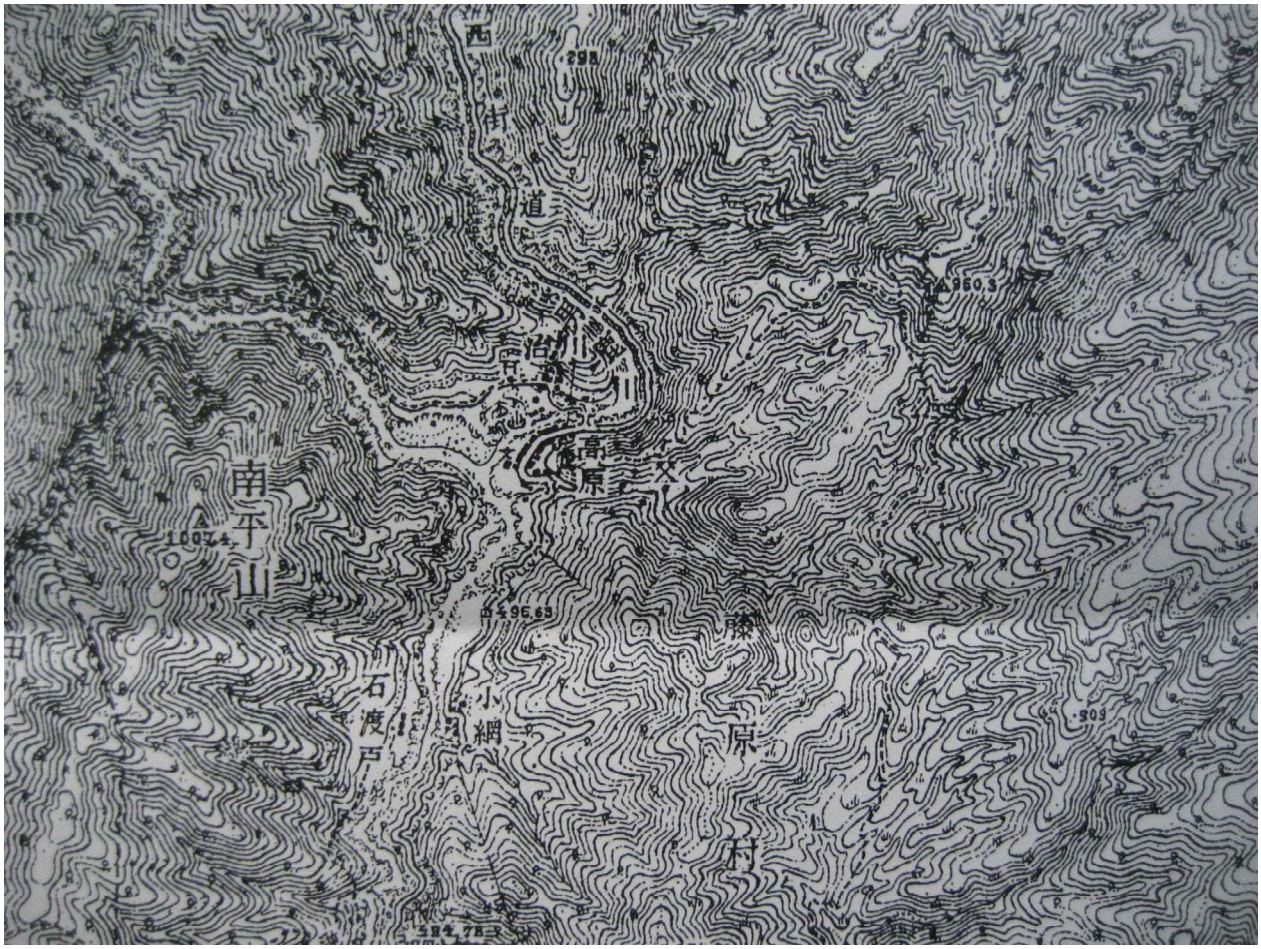

図３　大正元年（１９１２年）測図の古い地形図である。凡そ１００年前の川路地区の様子である。五十里ダムも、川治ダムも、会津鬼怒川線の鉄道も無い。最新の地形図の図１と対比するのも面白い。中央の文字「高原」の所に、鉱山記号がある。偶然に見つけた。

鉱山跡写真

写真１　消防署の脇を通り抜け、舗装された林道を登り上がってくると、道路は終点となる。路面に駐車線が引かれている。ここは遊歩道の一部でもある。正面の向こう側が大下沢である。

写真２　大下沢にある取水堰を目指して，斜面を下る。取水堰の上流は堰一杯に土砂が堆積している。堰の上で、上流を向いての、左手の沢水準に縦長の坑口穴が見える。写真の中央部。

写真３　坑口を正面から見る。入口の高さは結構ある。沢の水量が多いときには、水こぎとなるか。入口の右手からも近づける。

写真４　坑口内に少し入っての内部の様子。床の土砂の状態からすると、坑道は冠水したことが分かる。直ぐ下流に堰ができたので、沢床が上昇し、沢の水量が多いときに冠水するようになったのであろう。坑道の奥がどうなっているのか確かめてはいない。

治水事業に伴う、砂防ダムの建設により、沢水準に合った坑口、鉱山跡が埋まってしまった例は少なくない。

写真５　１回目の探査時には見つけていなかった坑口跡である。写真画面中央の円形気味の黒い部分から結構水が流れ出していた。見つけたが、坑口手前は結構深い淵になっており、近接することができなかった。夏か、渇水期にでも再訪問しよう。

沢の左岸にある、旧用水道を登っていると、この坑口跡の少し上流側に、この坑口と繋がっているような坑口跡を見つけた。その穴の位置は右岸、自分は左岸。沢の水量もありそうなので、近接するのは止めた。

写真６　旧用水道を更に登って行くと右岸に坑口らしい黒い穴を見つけた。写真中央少し左上の黒い部分。これも、近接するのは止めた。

写真７　旧用水道の現状。下流の住宅地近傍までこのような状態である。

写真８　水道管が沢を渡っている箇所の様子。歩道がしっかりと設置され、手すりまで着いている。構造はまだまだしっかりしている。用水道跡は歩きやすい。

写真９　現地から旧水道を経由して、住宅地まで下山した。下山口を振り返っての一枚。ここから登り上がると、２つのダムを同時に一望できる展望台に行き着けるとの看板があった。このような展望台は日本にはここだけとのこと。一見の価値があったか。その後、Ｐの位置まで遊歩道を上り上がることになったが。

鉱物写真

写真１１　写真２，３，４で紹介した坑口内で撮影。坑壁に緑色の塊があった。孔雀石と思う。写真１２も参照。

写真１２　写真１１で撮影した箇所の近くには、坑壁が緑色でベタ塗りされている箇所があった。やはり孔雀石であろう。
この鉱山は銅鉱石を産出していたといえる１つの証拠である。

林道の終点Ｐから取水堰には、山の斜面を下るだけであるが、堰の所の沢の右岸は絶壁である。坑口跡へは、一度、沢の右岸から左岸に渡る必要がある。水量のあるときは堰を渡るのは危険である。堰自体はさほど高くはないので、はしごなどを持参すれば、堰を容易に上り下りできよう。或いは住宅地から、旧用水道を経て、現地にたどり着く方法もある。が、その場合には、車をどこに駐車させてよいのか，確かめてはいない。１，２台程度ならば写真９で示している入口付近に置けよう。

参考文献

なし